

初級フランス語における スピーキング能力の可視化

ータスク評価法と学習ストラテジー
の観点からー

佐藤千秋、エロディ・ファール、川口裕司

0. 発表の流れ

1. スピーキング能力研究
2. 評価尺度・評価方法
3. 学習ストラテジーの観点から
4. CEFRに基づく評価尺度と学習ストラテジーの関係
5. 結論

1. スピーキング能力研究

研究の流れ

1980年代以前 「正確さ、流暢さ」

1990年代 「複雑さ」の側面

W. Levelt (1989)

Speaking From Intention to Articulation, Cambridge, MA: MIT Press.

IWASHITA N., BROWN, A., MCNAMARA, T. and O'HAGAN, S. (2008).

“Assessed Levels of Second Language Speaking Proficiency: How Distinct?”, *Applied Linguistics* 29/1: 24-49.

フランス語のスピーキング能力

初期の研究 CAROLL (1972)等

TOWELL, R., HAWKINS, R. and BAZERGUI, N. (1996).

“The development of fluency in advanced learners of French”,
Applied Linguistics 17/1, 84-119.

MACINTYRE, P.D., CLÉMENT, R. & DONOVAN, L.A. (2002).

“Willingness to communicate in the L2 among French immersion students”,
Paper presented at the Second Language Research Forum, Tronto.

対象者： 上級のフランス語学習者

日本人フランス語初級学習者

原田 (1998), 大岩(2006) の学習ストラテジー分析
川口・杉山(2014) 学習者の言語能力
KOGA and SUGIYAMA (2015) 流暢さ

初級フランス語におけるスピーキング能力可視化の試み ーCEFR-J自己評価、タスク評価、学習ストラテジー調査ー

佐藤、関、伊藤、川口 (2015), 『ふらんぼー』 41, 165-183.

Levelt モデルから着想

- ① CEFR-Jを用いた自己評価(言語化以前の潜在的な能力)
- ②スピーキングタスク評価(言語化されたスピーキング能力)
- ③スピーキング学習ストラテジー調査(活動を自己管理する能力)

以上を用いて、初級フランス語におけるスピーキング能力を可視化しようと試みた。

調査対象: 東京外国語大学フランス語専攻2年生: 26名

実施日: 2015年1月(17名)、5月(9名)

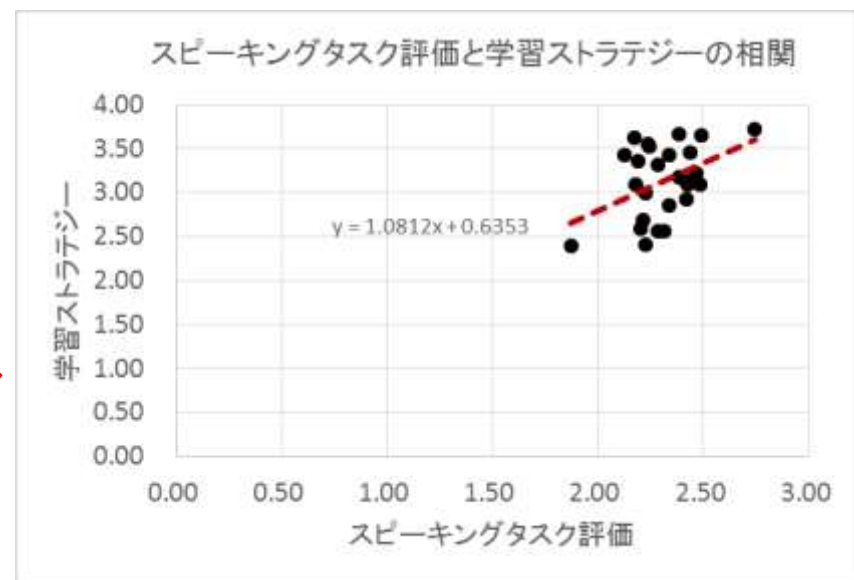
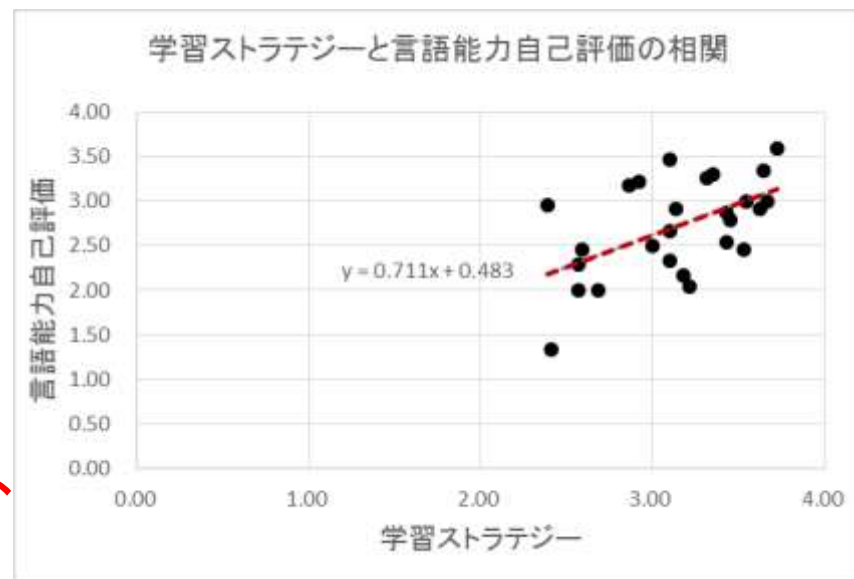
調査結果

- ・学習ストラテジーと言語能力自己評価
強い相関(1%の危険率)

→言語能力自己評価が高い学習者は、
学習ストラテジーを多用する傾向。

- ・タスク評価と学習ストラテジー
有意な相関(5%の危険率)

→スピーキングタスク評価が高いほど、
学習ストラテジーを多用する傾向。



本研究の目的

- スピーキング評価法の検討

- ① **タスクの遂行**を評価(2015年度のスピーキング評価)

- ② **言語能力レベル**による評価(今回のスピーキング評価)

- American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL)
 - Common European Framework of Reference (CEFR)

- 学習戦略とスピーキング評価の関係性を再考

- スピーキングタスク評価が高い学習者は学習戦略を多用する傾向

- 学習者レベルの均質化

- 2015年度調査の26名のうちレベルがB1以上と思われる3名を除き、
23名について今回は調査

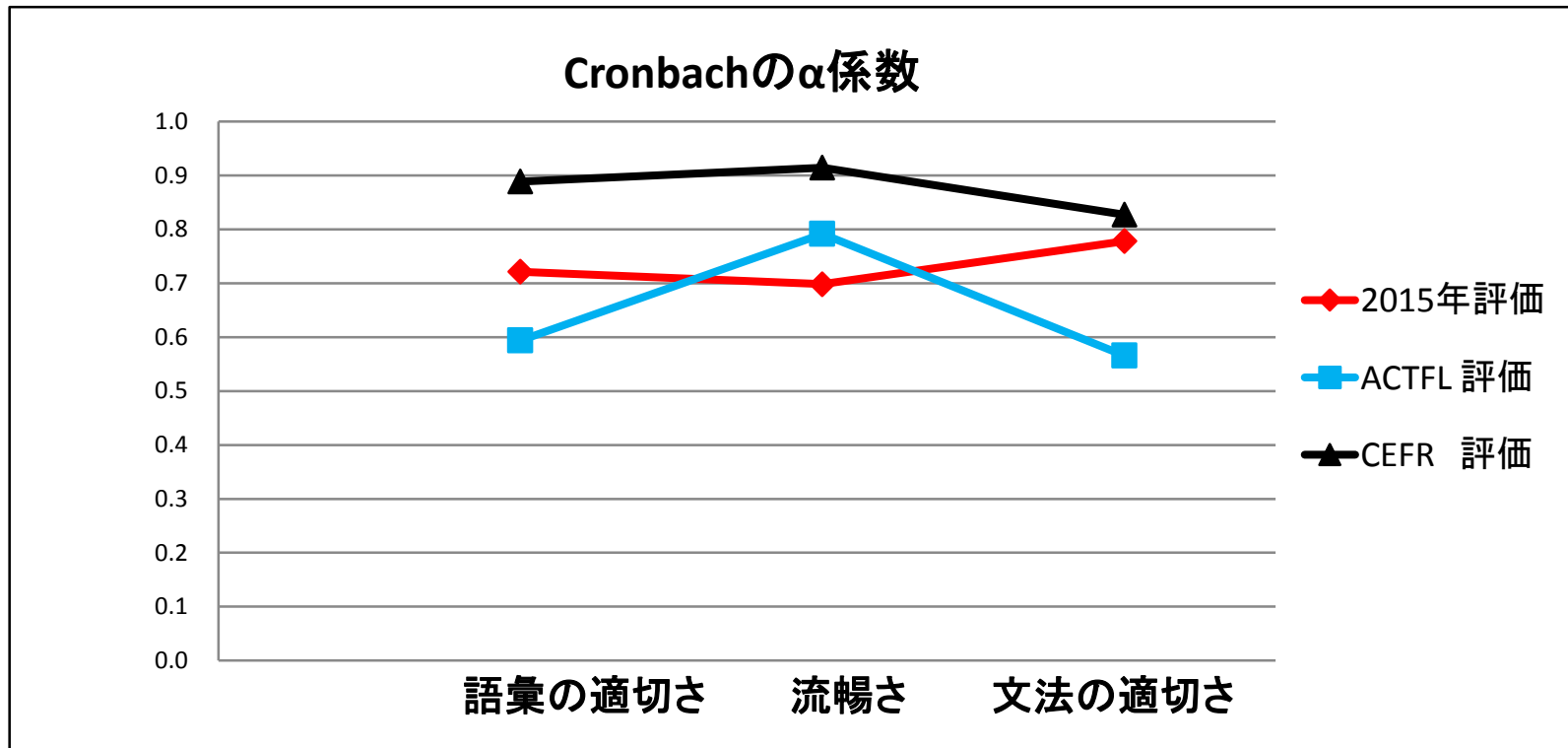
2. 評価尺度

2015年評価 ガイドラインなし	ACTFL評価 ガイドラインあり	CEFR評価 ガイドラインあり
3つの評価観点： ①語彙の適切さ、②流暢さ、③文法の適切さ		
タスクの種類の区別なし		タスクの種類の区別あり 「やりとり」「発表」
2015年	2016年10月	2016年11月
タスクの遂行	言語能力レベル ACTFLの中級	言語能力レベル CEFRのA1からB2まで
4段階の尺度： 1わるい～4とてもよい	4段階の尺度： 1中級low～4それ以上	4段階尺度： 「やりとり」：1 A1～4 B2 「発表」：1 A1～4 B2

評価方法

	ACTFL評価	CEFR評価
文法の適切さ	ACTFLの基準をもとに 評価者が作成	CEFRの基準
語彙の適切さ	ACTFLの基準をもとに 評価者が作成	CEFRの基準
流暢さ	評価者が作成	

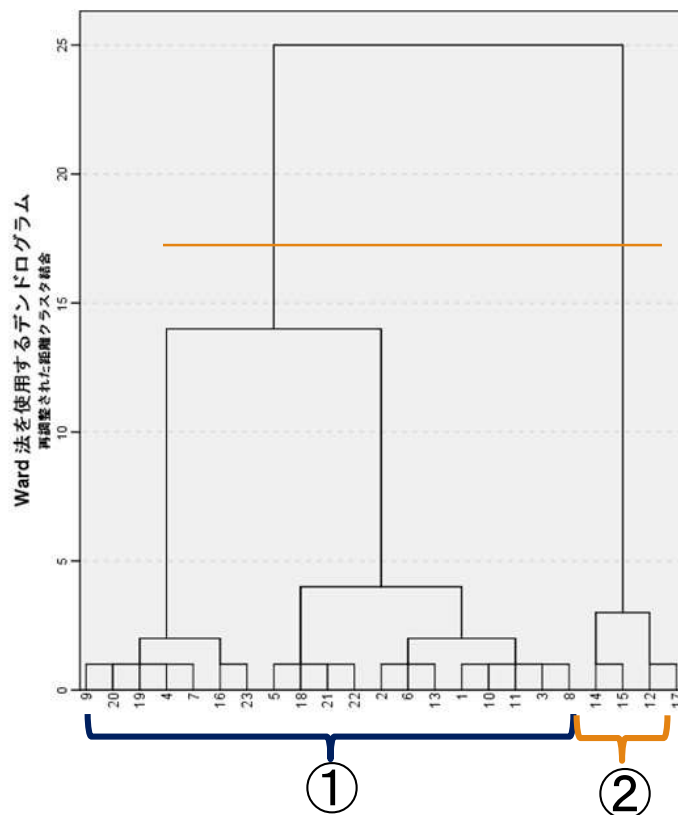
Cronbachの α 係数



- 2015年評価よりCEFR 評価の方が高い
- ACTFL評価：流暢さ以外、信頼度係数が低い
- 全体としてCEFR評価が最も高い

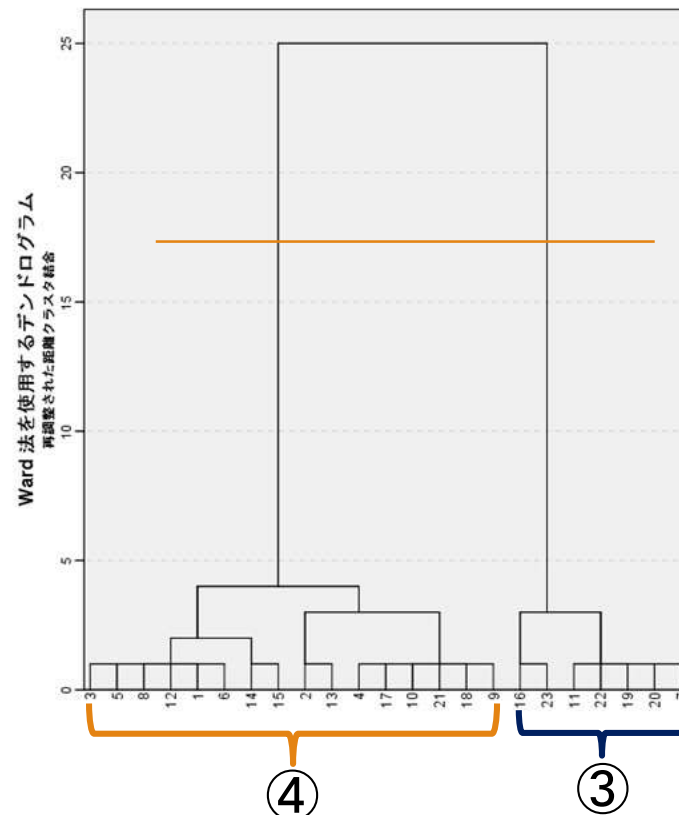
ACTFL評価

(平方ユークリッド距離、Ward法)



中級mid達していない

CEFR評価



A2達していない

① 低いグループ: 19人/最大平均: 2.4未満

③ 低いグループ: 7人/最大平均: 1.9未満

② 高いグループ: 4人/平均: 最小2.4以上

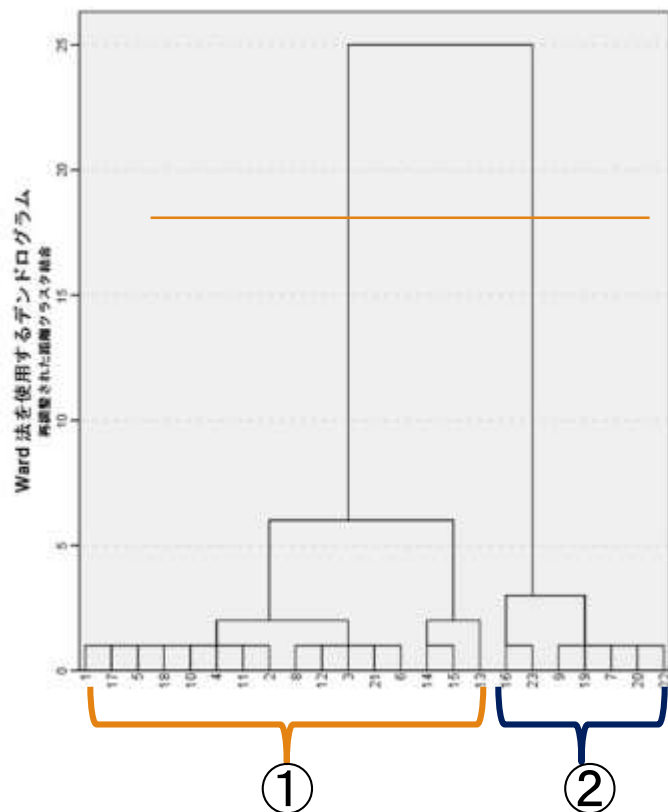
④ 高いグループ: 16人/最小平均: 1.9以上

満点は4.0

CEFR評価「やりとり」

CEFR評価「発表」

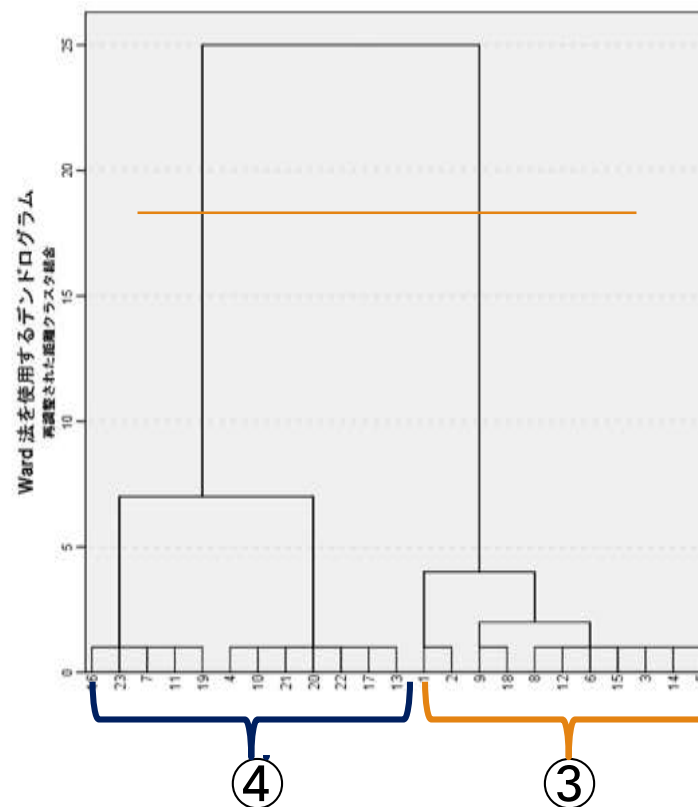
(平方ユークリッド距離、Ward法)



A2達していない

② 弱いグループ: 7人/最大平均: 2.00未満

① 強いグループ: 16人/最小平均: 2.00以上



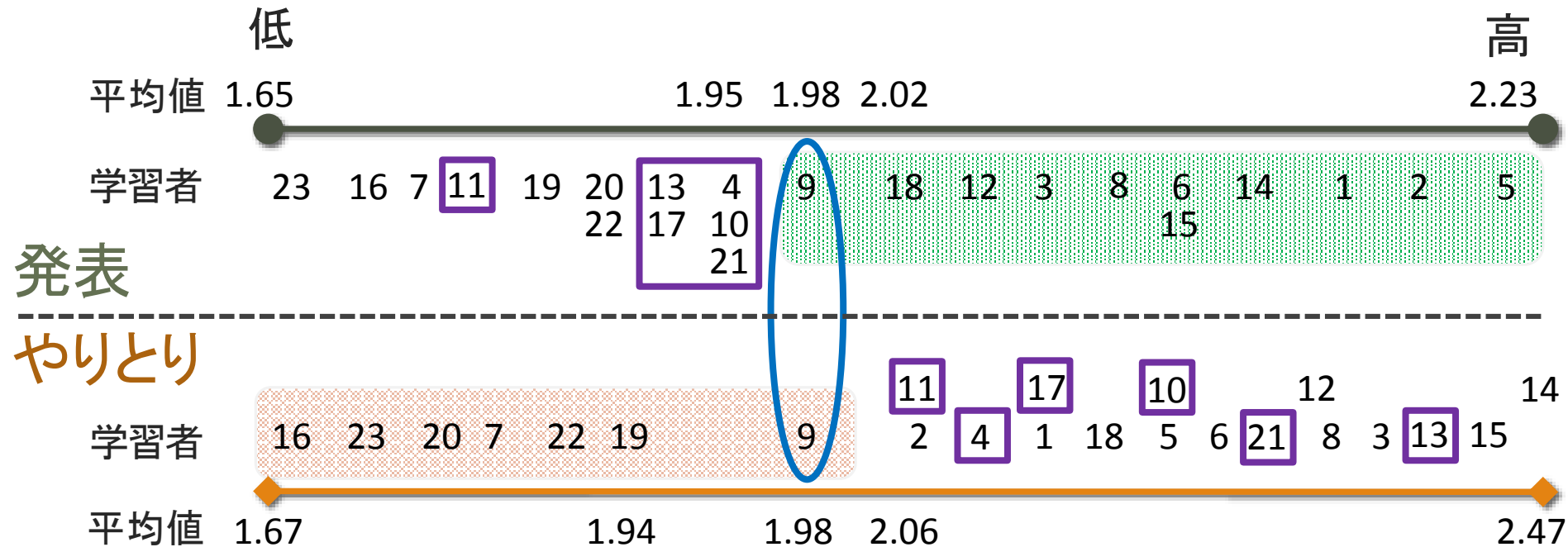
A2達していない

④ 弱いグループ: 12人/最大平均: 1.95以下

③ 強いグループ: 11人/最小平均: 1.98以上

満点は4.0

「やりとり」と「発表」の関係



- t検定で、「やりとり」と「発表」の平均には、1%の危険率で有意差がある
- □ 「発表」の評価が低いのに、「やりとり」の評価が高い
- ○ 「発表」の評価が高いのに、「やりとり」の評価が低い

3名における「やりとり」と「発表」の関係

学習者 9			
	語彙の適切さ	文法の適切さ	流暢さ
発表	2.00	1.40	2.55
やりとり	1.86	1.55	2.55

「発表」の語彙の適切さの平均値が2.00以上

「やりとり」で、語彙の適切さ、文法の適切さのどちらかが2.00以上

満点は4.0

学習者 11			
	語彙の適切さ	文法の適切さ	流暢さ
発表	1.45	1.45	2.25
やりとり	1.77	2.00	2.41

学習者 13			
	語彙の適切さ	文法の適切さ	流暢さ
発表	1.85	1.95	1.90
やりとり	2.23	2.41	2.23

語彙の適切さ、文法の適切さのどちらかが2.00以上であれば平均値は高い

スピーキング評価のまとめ

- ・ 3つの評価ではCEFR評価が一番信頼度が高かった
- ・ 「やりとり」と「発表」では、「やりとり」の方が平均値が高い
- ・ 「やりとり」と「発表」で平均値の差があった場合は、文法の適切さと語彙の適切さが影響している

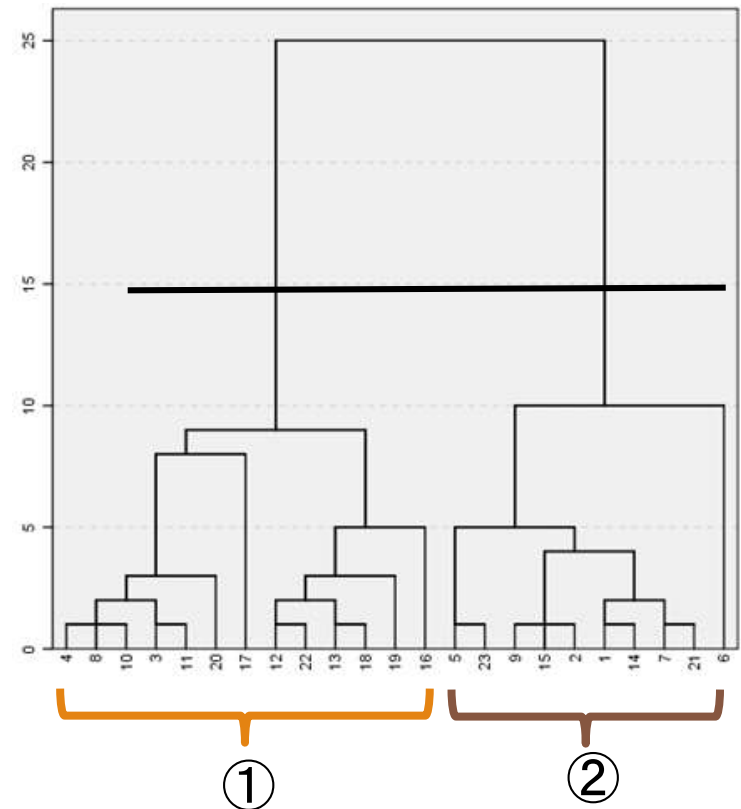
3. 学習ストラテジーの観点から

学習者ごとの分析

23名を二分類

(平方ユークリッド距離、Ward法)

- グループ①: 学習ストラテジーをあまり用いない。
- グループ②: 学習ストラテジーをより多く用いている。

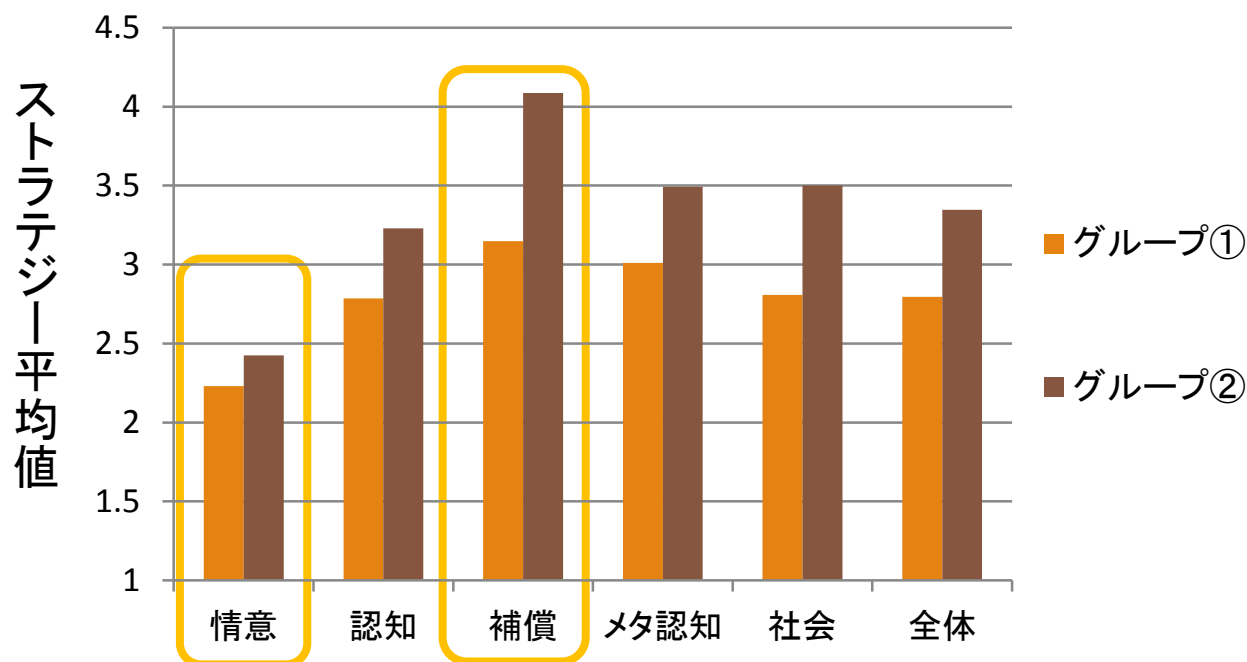


情意：大きな差なし、5カテゴリー中最低値。

- 学習において感情面のコントロールをあまり行わない。

補償：両グループで最高値。特にグループ②の平均値は4（通常当てはまる）

- フランス語習得のために補償を主に活用。



6.常に当てはまる

5.よく当てはまる

4.通常当てはまる

3.ときどき当てはまる

2.あまり当てはまらない

1.全く当てはまらない

学習ストラテジーのまとめ

よく使われる

- 補償：自分の知っている知識を活用。

あまり使われない

- 情意：情意的側面ほとんど重視せず。

その他

- メタ：適切性、スピーキング理解度に注意。授業の目的や最終目標意識。予定や目標の具体化乏しい。
- 認知：知識を身に着ける意欲。ネイティブと関わる機会少ない。
- 社会：聞き返し等による理解。会話でのフランス語使用頻度低い。

4. CEFRに基づく評価尺度と学習戦略の相関

CEFR「やりとり」、「発表」、全体と学習戦略

情意

	使用頻度 高	使用頻度 低
「やりとり」	高評価	低評価
「発表」	高評価	低評価

補償

	使用頻度 高	使用頻度 低
「発表」	高評価	低評価
全体	高評価	低評価

→ 情意、補償学習戦略の使用頻度が高い方が、スピーキングに対する評価が高くなる傾向がある。

「やりとり」「発表」と学習ストラテジーの傾向

「発表」・高 / 「やりとり」・低 (学習者 9)

- | | |
|----|--------------------------------|
| 認知 | スピーキングの機会を探す。フランス語で独り言を言う。 |
| 補償 | 新語を作る。 |
| 社会 | 他の学習者とフランス語で会話、ネイティブによる間違いの訂正。 |

「発表」
語彙の適切さ
2.00以上

「やりとり」・高 / 「発表」・低 (学習者 11, 13)

- | | |
|----|---------------------------|
| 認知 | 日本語で考えてフランス語に置き換える。 |
| 社会 | 途中でやめずに最後まで伝えようとする。 |
| 補償 | 伝えたいことを省略、表現を簡略化。 |
| メタ | 本や雑誌を参考にスピーキング能力向上の方法を模索。 |

「やりとり」
文法の適切さ
2.00以上

発表・高: **語彙**を適切に使用。スピーキングの実践に積極的。

やりとり・高: **文法**をより適切に使用。フランス語の正確性重視。

5. 結論

スピーキング評価:

- 3つの評価間においてCEFR評価が最も信頼度が高い。
→ 具体的なレベルや項目についてのガイドラインが存在することで評価結果が一致しやすくなる。
- 「やりとり」と「発表」では前者の方が評価の平均値が高い。
2つの間に差がみられた場合、文法の適切さと語彙の適切さの平均値が関係している。

学習ストラテジー：

- 初級者は補償ストラテジーの使用頻度が最も高いのに対し、情意ストラテジーを重視していない。情意、補償ストラテジーの使用頻度が高い方が、スピーキングに対する評価が高くなる傾向がある。
- 「発表」の評価が高い学習者：語彙を適切に使用。スピーキングの実践に積極的。
- 「やりとり」の評価が高い学習者：文法をより適切に使用。フランス語の正確性重視。

参考文献

- BACHMAN, Lyle F. , SAVIGNON, Sandra J. (1986). “The Evolution of Communicative Language Proficiency: A Critique of the ACTFL Oral Interview”, *The Modern Language Journal*, vol. 70 n4, 380-390
- CHAUVET A. & NODMAND I., ERLICH S. (2009). *Référentiel : des contenus d'apprentissage du FLE en rapport avec les six niveaux du Conseil de l'Europe, à l'usage des enseignants de FLE*, CLE Internationale, Alliance Française, Paris.
- IWASHITA N., BROWN, A., MCNAMARA, T. and O'HAGAN, S. (2008). “Assessed Levels of Second Language Speaking Proficiency: How Distinct?”, *Applied Linguistics* 29/1: 24-49.
- Levelt W. (1989). *Speaking From Intention to Articulation*, Cambridge, MA: MIT Press.
- MACINTYRE, P.D., CLÉMENT, R. & DONOVAN, L.A. (2002). “Willingness to communicate in the L2 among French immersion students”, Paper presented at the Second Language Research Forum, Tronto.
- SWENDER, E. (2003). “Oral Proficiency Testing in the Real World: Answers to Frequently Asked Questions”, *Foreign Language Annals*, v36 n4, 520-552
- TOWELL, R., HAWKINS, R. and BAZERGUI, N. (1996). “The development of fluency in advanced learners of French”, *Applied Linguistics* 17/1, 84-119.
- 岡秀夫編集, 垣田直巳監修 (1984).『英語のスピーキング』, 東京: 大修館書店.
- 佐藤千秋、関敦彦、伊藤玲子、川口裕司 (2015).「初級フランス語におけるスピーキング能力可視化の試みーCEFR-J自己評価、タスク評価、学習ストラテジー調査ー」,『ふらんぼー』41,東京外国語大学フランス語研究室: 165-183.
- 川口裕司, 杉山香織 (2014).「初級フランス語における達成度指標 CEFR-Jを用いた自己評価とタスク評価との関係」,『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室: 131-149.
- 馬場哲生 (1997).『英語スピーキング論 話す力の育成と評価を科学する』, 東京: 河源社.
- 原田早苗(1998).「効果的な外国語学習ストラテジーとは？」,『フランス語教育』26, 日本フランス語教育学会, 57-63.
- ACTFL, (2012). *ORAL PROFICIENCY INTERVIEW FAMILIARIZATION MANUAL*,
<https://www.languagetesting.com/wp-content/uploads/2012/07/OPI.FamiliarizationManual.pdf> last check on 13/11/2016
- ACTFL Proficiency, <https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012/french/expression-orale#intermediate> last check on 13/11/2016

謝辞

本研究は、

JSPS科研費 26284076「Eラーニングに基づく英語とフランス語の学習行動の可視化の試み」, 基盤研究B, 2014-2016, 代表者 吉富朝子

JSPS科研費 16H03442「フランス語、ポルトガル語、日本語、トルコ語の対照中間言語分析」, 基盤研究B, 2016-2019, 代表者 川口裕司

の助成を受けたものです。